１．

　けばけばしい色のテロップが画面を埋め尽くす。番組のタイトルを表示するそれが消えると、満面の笑みを浮かべた女性がマイクを持って話し出した。
「さて、本日のゲストは映画『衰弱の回廊』の原作者である良秀先生です」
　若い女性のインタビュアーが原稿を読み上げると、スタジオ内に作られた扉が開いた。中からはメガネをかけた男性が現れた。
「こちらへおかけください」
　インタビュアーが水を向けると、良秀はにこりともせず椅子に座った。
「本日はよろしくお願いします」
「はい」
「映画化おめでとうございます。ご自身の小説が原作で映画を作られるのはどういう気持ちでしょう？」
「恥ずかしいですね」
「恥ずかしいのですか？」
「ええ。まあ、デビュー作のほうが映画化されるとは思わなかったので。昔の作品は下手くそで見ていられないです」
「ご謙遜を。大好評じゃないですか」
「そうですか」
　必死で場を盛り上げようとするインタビュアーに対し、良秀は冷めた様子だった。このままでは番組が盛り上がらない。インタビュアーは場を切り替えることにした。
「ええ、そうですよ。読者から番組と先生にたくさんのお手紙をもらっています。その中にいくつか質問がありますが答えていただけますか」
「はい」
「では、最初の質問です。先生は医師としての経歴を持っているとのことですが、『衰弱の回廊』はやはり自身の経験が元になっているのですか？」
「はい。あの作品は私の実体験が元になっています。ただ、その時私は……」

　質問の答えを聞き終える前に裕二はテレビの電源を消した。
「チッ……」
　裕二はリモコンを放りだして仕事に戻った。白衣のポケットからペンを取り出し、カルテの確認を始めた。
「あれ？　最後まで見なくていいんですか？」
　弁当箱をつついていた看護婦の利恵がリモコンを拾い上げて、テレビをつけ直そうとする。
「そろそろ昼休みも終わりだろ」

「でも、今のって先生のお兄さんですよね？」
「まあね」
　裕二は苦虫をかみつぶしたような顔をして答えた。利恵は裕二の表情に気が付かずに、話題を続けた。
「すごいですね。ご家族の方がテレビに出るなんて、うらやましいです」
「そんないいものじゃないよ。もう何年も会ってすらいない」
「え〜なんでですか？」
「……君、アイツの本読んだ？」
「私は読んだことないです」
「そうか……ならいいや」
　それだけ言い残して、裕二は回診に向かう。利恵は慌てて追いかけた。
「あ、待ってくださいよ」

「……ふう」
　インタビューを終えた良秀は深いため息をついた。人前に出るのが苦手と言うわけではないが、テレビのインタビューとなるとやはり緊張する。自分の小説が映画になると決まってからこの手の仕事が増えたがまだ慣れない。どうせ一時的なものだと思い引き受けたが、自分はこういうことに向いていないと思しだしていた。こんなことなら、取材拒否の頑固者というキャラクターにしておけばよかったかもしれない、とまで考えていた。
　テレビスタッフへの挨拶もそこそこに良秀は帰ることにした。
　次回作の執筆をするつもりだった。良秀は書き終えた作品に執着しない。打ち合わせの時は自分の主張が通るまで何時間でも話し込むのに、入稿が終わるとスイッチが切れたように作品の行く末に無関心になる。重版が決まった時も、映画化が決まった時も、ぼんやりと関係者の話を聞き流していた。
　そんな良秀はあえてキャラクターを作らずとも、関係者の間では十分に職人肌の頑固者だと思われている。

　帰宅した良秀は締め切りを確認するために、スケジュール帳を開いた。
　スケジュール帳には締切と編集との打ち合わせ、映画関係の取材の予定しか載っていない。
　載っていないはずだったが、明後日の欄に『実家』と書かれている。
「？　なんだっけ……ああ、十三回忌か。さすがにさぼれないな」
　良秀はパソコンを立ち上げて、インターネットに接続した。実家へ帰るための交通手段を確保するつもりだった。

　仕事から帰った裕二が最初にするのは翌日の予定を確認して、その準備をすることだ。

翌日は午前上がりだった。そして、帰宅後には実家に帰る。父親の十三回忌があるからだ。

裕二は礼服の準備を始めた。

２．

その日、高速道路はスムーズに流れていた。

週末ではあるが、レジャーシーズンではないので車の数は多くはない。

裕二はその中で、愛車を飛ばしていた。渋滞にならないのはありがたい。連日の激務の合間を縫って、実家に向かっていた。疲れがたまっていて、できれば眠りたかった。運転に集中していれば問題ないが、渋滞になると居眠りしてしまうかもしれない。

パーキングエリアが見えたが通り過ぎた。なるべく早めに行って、手伝わなければならないことがあるからだ。実家には母親が一人なので、早く帰ってあげたかった。

裕二はトンネルに入った。いくつもの山の中を通り抜ける長いトンネルだ。

裕二はヘッドライトをつける。

しかし、ライトが作動したはずなのに、裕二の視界は真っ暗になった。

気が付くと目の前にコンクリートブロックが積み上げられていた。

裕二はまだ愛車の中にいる。車内にいるのに目の前には壁。エアコンの効いているはずの車内の空気がやけに埃っぽい。最初に考えたのは自分が居眠り運転をしてしまい、壁に激突してしまったということだった。

「いや、それはない」

医者として、何度も夜勤を経験してきた。その中で居眠りをしたことなど一度もない。医師の矜持に賭けて、居眠りなど決してしない。

そこまで考えて、自分の思考がおかしな方向へ行っていることに気が付いた。

「落ち着け」

裕二は周囲を見渡した。辺りは明かりが少ない。五メートル先が見えるか見えないかくらいだ。トンネルの中にいるはずだが、これでは運転にも支障が出る。つまり、なにかしらの異常が発生しているはずだ。

状況を確認するためにシートベルトを外して、外に出ようとする。体を動かすとあちこちから痛みが走った。

やはり、衝突事故だろうか。

しかし、外に出るとそうではないことに気が付いた。

コンクリートブロックは車の前ではなく、上に載っていた。ボンネットの部分が潰されている。天井部分が崩れて、車の上に落ちてきたのだ。

裕二はほんの少し落下位置がずれていたら、と考え身を震わした。

改めて、車外の様子を確認すると瓦礫だらけで、大きな崩落事故が起きたのだと思われた。
「くそ……誰か、誰かいないのか」
裕二は助けを求めて、叫び声を上げた。
「誰かいるのか？」
その声に答えるものがいた。裕二は助けが来たのだと思い声がした方へ駆けだした。しかし、声の主は良く知った顔で、助けが来たわけではないことがすぐに分かった。
「なんでアンタがいるんだよ？」
「新幹線の指定席が取れなかったからだ」
そこにいたのは裕二の兄であり、小説家の良秀だった。
「そういうことを聞いているんじゃない」
「だったら、わかりきったことだな。親父の十三回忌に決まっているだろう」
「どういう風の吹き回しだ？」
「行かないなら行かないで、文句を言うくせに」
良秀は面倒臭そうに頭を掻いた。
「東京側を見てきたが、出口が塞がっていた。崩落事故だな」
「反対側は？」
「まだ、見てないな……で、怪我はないのか？」
「え、ああ、俺は平気だ」
「そうか。じゃあ、さっさと行くぞ」
「どこへだ？」
「他の生存者を探しに行くに決まっているだろ。どうせお前のことだから、トランクに道具積んでんだろ」
良秀はトンネルの出口のほうへ向かって歩き出した。

３.

裕二はトランクの中に、医療道具を詰め込んだスーツケースを持っていた。スーツケースを引きずる裕二と、良秀は瓦礫を避けながら進んでいく。
「今、何か聞こえなかったか？」
良秀は誰かのうめき声が聞こえたような気がして、裕二に話を振ってみた。
「さあ、聞こえなかったけど……」
「いや、聞こえた」
良秀は早足になり、奥へ進んだ。裕二は慌てて追いかけようとするがスーツケースが重たくうまく進めない。次第に距離が離れ、良秀の姿は暗闇に紛れてしまった。
「まったく。いつも勝手なんだから……」

裕二が良秀を見つけた時、良秀は誰かを介抱しているようだった。介抱されているのは初老の男性、見た限りでは外傷はないようだ。
「傷はないけど、意識もない」
「見せてくれ」
裕二は男性の脈を取った。脈は止まっている。
裕二は男性に心臓マッサージをしようとして、服をまくり上げた。その時に男性が首から巾着袋を提げていることに気が付いた。中を確認してみると、ピルケースが入っていた。
「そういうことか」
裕二はそれでだいたいの経緯を察した。恐らく、もともと心臓病を持っていて、事故のショックで発作が起こったのだろう。
裕二は時間を確認して、心臓マッサージを始めた。
良秀はその様子を見ていて、自分の出る幕がないことを悟った。
「俺は先に行って奥を見てくる」
「ああ、アンタの出る幕はない」

良秀はしばらく歩いていると、大型トラックとそれに追突している乗用車を見つけた。トラックの荷台には荷物が載っていなかった。トラックの周囲には天井の瓦礫とは違う。鉄骨や鉄パイプが散乱している。それらがトラックの荷物なのだろう。
良秀は最初に乗用車の中を確認することにした。
乗用車の中を覗く。
中には二十代くらいの男性が座席に縫い付けられていた。鉄パイプが男性の胸板と座席を貫通しており、男性は昆虫標本のようになっている。
「死んでるか？」
「……誰か、誰かいるのか？」
即死かと思われたが、男性は微かに意識があった。かすれて声で良秀に呼びかける。
「ああ。助けに来た」
「何が起こった。体が動かないんだ。助けてくれ」
男性は震えた手を良秀に差し出した。
自分の状態に気付いていないようだった。傷が深すぎて、痛みすらも麻痺してしまったのだろう。
良秀は男性の手を力強く握った。
「ちょっとぶつけたようだ。出血が多いが安心しろ。俺の弟は医者だ。アンタは助かる」
男性の瞼が眠気をこらえるように落ちかけている。
「眠いなら、寝ろ。起きることには病院のベッドだ」
しばらくすると、良秀は男性の手の震えが止まっていることに気が付いた。

「おい。中はどうなってる？」
　良秀は後ろから声をかけられたので振り返った。そこにいたのは裕二だった。
「そっちこそどうなったんだ？」
「時間切れだ。意識が戻らなかった」
「こっちは見てのとおり即死だ」
　裕二は乗用車の中を覗いた。医者の目から見ても、生きているようには思えなかった。
「……即死だったのか？」
「ああ、見たまんまだろ」
「それにしては穏やかな死に顔だ」
「自分が死んだことにも気づかなかったんだろう。ここはもう無理だ。次の患者のところに行くぞ」
「わかってる」
　裕二は、今度は医者の自分が先に患者を見つけるのだ、と思い先に進んだ。良秀もすぐ後に続くが一度だけ、足を止めて乗用車を振り返る。
「まあ、作り話が仕事だからな」